

血液がんの移植件数(大人)

①自家移植②同種末梢血幹細胞移植③同種末梢血幹細胞移植(04~06年の3年間実績)④異種末梢血幹細胞移植(04~06年の3年間実績) 担当診療科は原則、血液内科、血液疾患専門科、血液病棟、骨髄移植科、担当診療科が異なる場合は、担当診療科を示す(血液内科)などと明記した。担当診療科が異なる場合は、担当診療科を示す(血液内科)などと明記した。

①	②	③	④	
北海道	札幌北倫 45	40	26	16
	北海道大 33	49	10	17
	北海道大(2内)	29	12	11
	札幌医大(1内)	21	16	10
	札幌医大(4内)	0	8	0
	旭川赤十字	18	15	4
	市立札幌	25	1	3
	市立旭川(内)	4	4	4
	手稲区二会	20	0	0
	市立函館(内)	3	6	3
	国・北海道がん	9	0	0
青森	県立中央	6	24	0
岩手	岩手医大	29	8	19
秋田	秋田大(3内)	15	20	10
山形	山形大(3内)	4	6	18
福島	県立医大	13	13	6
	北福島医療セ	7	4	3
	筑波大	34	34	12
	筑波記念	6	0	8
	土浦協同	23	16	0
	日立総合	23	0	3
	自治医科大	9	37	0
	独協医大	12	19	0
	馬場生済会前編	0	4	3
	国・西群馬	37	0	18
	群馬大	14	13	2
	防衛医大	14	27	8
	埼玉医大国際医療セ	18	14	4
	腫瘍科)※	17	7	5
	深谷赤十字	0	22	15
	千葉大	30	22	10
	成田赤十字	14	2	10
	亀田総合	1	29	14
	千葉市立青葉(内)	10	13	9
	茨城医大	7	8	2
	国立がん七東(化学療法科)	26	0	0
東京	虎の門	62	92	60
	国立がん七中央(幹細胞移植科)	87	93	100
	都立駒込	46	119	38
	都立駒込(化学療法科)	16	5	4
	慶応大	62	74	4
	東大医科研	0	6	0
	日赤医療セ	42	5	13
	日本医大	19	14	4
	都立府中(輸血科)	2	7	0
	昭和医大	21	8	1
	帝京大(内)	12	21	3
	順天堂大	26	12	7
	東京女子医大	38	3	4
	慈恵医大	21	19	2
	N.T.T東日本関東	22	0	20
	国・東京医療セ	14	12	4
	杏林大	18	9	2
神奈川	東海大	2	51	1
新潟	新潟大	6	26	1
	県立こども医療セ(血)	0	15	3
	県立がん七新潟	10	13	7
	富山大	15	4	2
	金沢大	4	9	1
	福井大	0	5	2
	信州大	0	17	0
	県立こども(血)	0	5	0
	岐阜市民	1	2	0
	名古屋第一赤十字(小児血液腫瘍科)	12	36	1
	名古屋大	0	15	0
	三重大	15	8	1
	滋賀医大	13	4	0
	県立小児保健医療セ	1	2	0
	京都大	12	14	1
	京都市立	0	2	1
	府立母子保健総合医療セ(血)	33	47	19
	大阪市立総合医療セ(小児血液腫瘍科)	18	10	4
大阪	大阪大	0	19	2
	松下記念	0	2	2
	近畿大	0	10	1
	大阪医大	0	5	0
	大阪赤十字	2	1	1
	県立こども(血)	13	22	1
	兵庫医大	4	6	0
	神戸大	0	1	4
	神戸市立医療セ中央市民	0	6	0
	奈良大	0	7	1
	和歌山大	0	1	2
	岡山大	0	15	0
	広島赤十字・原爆	2	17	0
	徳島大	0	3	3
	愛媛大	0	2	1
	福岡大	0	33	3
	九州大	0	7	8
	鹿児島大	1	3	2
	琉球大	0	0	1
兵庫	兵庫医大	55	58	25
	神戸大	24	19	14
	県立がん七	28	22	11
	社会保険神戸中央(内)	30	0	1
	奈良大	20	3	5
	高の原中央	23	2	14
	県立医大	16	2	7
	県立中央(内)	10	2	0
	県立中央	34	38	4
	倉敷中央	38	60	8
	国・岡山医療セ	50	9	16
	岡山医大	18	10	4
	岡山労災(内)	13	0	0
	国・南岡山医療セ	4	0	1
	広島赤十字・原爆(4内)	86	45	4
	広島大	17	3	9
	国・呉医療セ(内)	10	3	2
	国・広島西医療セ(内)	16	0	2
	山口大	35	22	17
	山口大	10	0	2
	社会保険下関厚生	48	0	2
	徳島大	10	0	0
	徳島赤十字	5	0	0
	厚生連徳島	0	5	0
	三豊総合(内)	6	0	0
	県立中央	17	42	3
	松山赤十字(内)	35	10	3
	高知大	11	12	3
	高知大	33	100	43
	浜の町	53	30	13
	九州大	31	24	12
	聖マリア	40	9	13
	久留米大	31	2	4
	国・九州がん七	20	25	11
	国・九州医療セ	19	0	14
	産業医大(化学療法センター)	15	20	2
	小倉記念	0	15	2
	九州厚生年金	17	0	0
	長崎大	10	30	4
	佐世保市立総合	9	12	9
	国・熊本医療セ	33	41	17
	大分大	30	14	14
	大分大	11	10	4
	厚生連鶴見	10	0	7
	九州大別府先進医療セ	1	0	0
	今村病院分院	14	16	3
	鹿児島大	3	5	15
	鹿児島大(2内)	14	0	0
	琉球大(2内)	19	4	7

子どもの患者の移植件数

①自家移植②同種末梢血幹細胞移植③同種末梢血幹細胞移植(04~06年の3年間実績)④異種末梢血幹細胞移植(04~06年の3年間実績) 担当診療科は原則、小児科、小児血液腫瘍科、担当診療科が異なる場合は、担当診療科を示す(血液内科)などと明記した。

①	②	③	④	
北海道	札幌北倫 6	11	0	8
青森	森手城 10	5	0	10
岩手	岩手医大 10	10	8	6
秋田	秋田大 3	14	0	5
山形	山形大 2	1	0	1
福島	県立医大 10	14	3	6
	県立こども	1	21	0
	独協医大	2	23	0
	群馬大	0	9	1
	県立小児医療セ(血)	1	24	4
	防衛医大	2	3	0
	県立こども(血)	5	18	0
	千葉大	0	4	1
	大板橋	13	12	0
	東京医科歯科大	0	12	1
	聖路加国際	1	3	0
	国立国際医療セ	1	3	0
神奈川	東海大 2	51	1	5
新潟	新潟大 6	26	1	3
	県立こども医療セ(血)	0	15	3
	県立がん七新潟	10	13	7
	富山大	15	4	2
	金沢大	4	9	1
	福井大	0	5	2
	信州大	0	17	0
	県立こども(血)	0	5	0
	岐阜市民	1	2	0
	名古屋第一赤十字(小児血液腫瘍科)	12	36	1
	名古屋大	0	15	0
	三重大	15	8	1
	滋賀医大	13	4	0
	県立小児保健医療セ	1	2	0
	京都大	12	14	1
	京都市立	0	2	1
	府立母子保健総合医療セ(血)	33	47	19
	大阪市立総合医療セ(小児血液腫瘍科)	18	10	4
大阪	大阪大 0	19	2	1
	松下記念	0	2	2
	近畿大	0	10	1
	大阪医大	0	5	0
	大阪赤十字	2	1	1
	県立こども(血)	13	22	1
	兵庫医大	4	6	0
	神戸大	0	1	4
	神戸市立医療セ中央市民	0	6	0
	奈良大	0	7	1
	和歌山大	0	1	2
	岡山大	0	15	0
	広島赤十字・原爆	2	17	0
	徳島大	0	3	3
	愛媛大	0	2	1
	福岡大	0	33	3
	九州大	0	7	8
	鹿児島大	1	3	2
	琉球大	0	0	1

血液がん「造血」補う移植法



51

血液の細胞ががん化した血液がんの年間死亡者数は推定で約1万人に達し、患者は若くも高齢者まで幅広い。その中で最も患者数が多い「慢性リンパ腫」は、血液中のリンパ球が体のリンパ節で腫瘍を作る病気で、発熱や体重減少などの症状が表れる。

次が、「白血病」。白血球、赤血球、血小板などに骨髄造血幹細胞ががん化する。正常な造血幹細胞を作れなくなり、貧血、出血、感染症などが起きる。「多発性骨髄腫」はリンパ球の一部の細胞ががん化する病気で、骨が溶けたり腎臓機能が悪化したりする。

「リンパ球がん」の移植の第一歩は、複数の抗がん剤でがん細胞を殺すこと。残念なことに、がんが再発した場合、造血幹細胞移植が行われる。がん細胞を死滅させるため、大量の抗がん剤と放射線で治療する。血液を作る

造血幹細胞は、骨髄から採取する。移植する。造血幹細胞の元となる健康な造血幹細胞を点滴で移植する。幹細胞の採取は、あらかじめ4種類の移植法がある。①「骨髄移植」は、あらかじめ自分の幹細胞を採取しておき、抗がん剤治療後に幹細胞を移植する。②「自家移植」は、健康な骨髄から幹細胞を含む骨髄液を取り出す。骨髄液の提供者は近親者に頼むが、骨髄バンクの紹介を受ける。

③「同種末梢血幹細胞移植」(表

③は腕の静脈から、献血と同じ要領で幹細胞を採取する。提供者に全身麻酔をかけて骨髄に針を刺し、骨髄液を採取する。骨髄移植に比べ負担が小さい。

新生児へのその精や胎盤の血液から幹細胞を取り出して移植するのが、胎盤血移植(表④)。

骨髄移植は骨髄バンク登録にかかわらず、ほぼ1か月かかると、腫結核保存された幹細胞を使うので、緊急性の治療にも対応

患者の静脈から成分献血の要領で幹細胞を採取。抗がん剤治療後、患者本人に戻す自家移植が行われる。(谷口修一さん提供)

4種 病院ごとに異なる専門

学会の調査を移植実績(2005年までの2年間)を報告した全国217の病院のうち4病院を対象にアンケートを実施した。216診療科が回答(回収率99%)があった。

04~06年の3年間に行われた移植件数は、4種類の移植法別を一覧にした。ただし、小児白血病は大人に比べて患者数が少なく、また、抗がん剤治療を主体としたため、主本人の患者が主体となる血液内科など、子どもを治療する小児科もある。

その結果、移植件数の合計は病院により血液内科で412件、3件(平均57件)、小児科で177件(平均21件)、と大きな差があった。全国でもっとも移植を行ううつの病院血液病部長の谷口修一さんは「移植後に患者が亡くなる原因は、移植されたリンパ球が患者の体を攻撃するGVHD(移植片対宿主病)や感染症があるが、経験豊富な病院は、免疫抑制剤などによる最適な治療で死亡率を減らす技術を持っている」と話。

大阪府立成人病センターが今年5月まで行った調査では、血液がんの1つ、慢性リンパ腫の

間の治療件数が多い医療機関ほど患者の5年生存率が高かった。移植件数が多い治療実績は病院の実力を知る指標となる。

病院によって得意な移植法が異なることにも注意が必要だ。骨髄移植を中心に4種類の移植法をすべて受け持つ「都立駒込病院(東京)」「聖路加国際(福岡)」「藤田医科大学(熱海市)」「東大医学部研究科付属病院」などがあ

また、一覧表には出ていないが、癌研有明病院(東京都東区)のように、移植治療をほかの病院に任せ、抗がん剤治療に専念する病院もある。病気の種類や治療法によつて、患者に合った病院が異なる。各病院のホームページも参考になる。(坂上尊)

次回(12月23日)は 子宮・卵巣がん

過去の「病院の実力」は、ヨミウリオンライン (<http://www.yomiuri.co.jp/iryou/medi/jitsuryoku/>) で読むことができます。